

吃音と「意見陳述」

写真は朝日 22 日夕刊 1 面。「吃音知って」今なら言える、という大きなタイトルに目がとまった。言葉が詰まってうまく話せない吃音のことを知ってほしいと、挑戦する若者がいる。10 月 22 日は国際吃音啓発の日。「症状が一番きつかった」のは、中学生のころだ。大阪府枚方市の大学生幸田悠さん(20)には、吃音の症状がある。中 3 の時、詩の音読発表。クラスで 1 行ずつ順番に読み上げていく。自分の番が来たときに「めっちゃどもって」しまった。どっと笑い声が上がる。「先生、なんか言ってくれないかな」。助けてほしくて先生を見たら、先生も笑っていた。「恥ずかしくて、消えてしまいたかった」昨年の夏、「注文に時間がかかるカフェ(注カフェ)」が始まった。吃音がある若者が接客の仕事に挑戦し、自信をつけてもらう試みで、自らも当事者の奥村安莉沙さん(30)=東京都=が各地で開いている。写真は吃音への理解を深めるクイズで客とやりとりをするスタッフの幸田悠さん=10 月 8 日、神戸市。



記事に注目したのは、私も吃音(昔はどもりと呼んでいた)に悩まされたからだ。幸田さんと同じように、中学時代の授業を思い出す。国語の時間に教科書を順番に読んでいくのがあり、順番が回ってくるころになると、心臓がドキドキして教室から抜けだしたくなる。キンチョーが極度に高まっており、第 1 音がなかなか出せず、先生から「注意」されたこともある。

英語は好きだったが、先生にあてられ、訳が分かっているにもかかわらず「パス」したこともある。今から考えると、よく登校拒否にならなかつたものだ。幼いころから、どもりに悩まされながらも、人を笑わせることが好きだった。教科書を読むのとは違い、自分で適当にアレンジして喋れるので、どもらずに「演技」できた。これが今でも寒い「やまだ式ダジャレ」に繋がっているのだろう。

どもりに悩まされた私が、大学の教員になるとは思ってもいなかった。人生は「偶然」や「運」に左右されるものだ。大学教員になっても最初に話すときはキンチョーした。でも講義を始めると、いつもの調子が出てくる。名古屋市立大を退職してから 8 年余り経つが、もういちど講義をしたくなることも多い。

10 日前の 18 日午後、大阪地裁で夢洲 IR 差し止め訴訟の第 1 回口頭弁論があった。私は原告の一人として、裁判長の前で「意見陳述」をした。時間は 10 分ということで、陳述の原稿案をつくり、他の原告からの修正案を入れて、A4 で 2 枚にとりまとめた。これで「えーよん」ということで、何回も声を出して練習して法廷に向かった。時間とともにキンチョーしてきたが、意見陳述を始めたら、いつもの調子が出てきた。時間に追われ、残念ながらダジャレは出せなかったが。忘れられない「意見陳述」である。

(2022 年 10 月 28 日)